安宅の関（角光嘯堂）

暮鐘 一点 寒山に響き

寂滅 煩惱 無常感

短歌 篠懸の露にや濡れん旅衣

如月の風は寒し 海津の浦

主従 彷徨 安宅の関

短歌 木芽山 夕べの雲やへだつらん

松風 寒し 関のとざしに

多少の関山 将に過ぎんとす

陸奥 千里 一步の間

諸国の勧進 一声に集まり

遊子の心情 人亦嘆く

解説 安宅の咳の守護、富樫氏が設けたと言われる関所。源義経が平泉を目指して通りかかり、弁慶が勧進帳を読むが、富樫は義経だと見破りはしたものの富樫の同情で通過出来たという物語を詩に託した。

語釈 語釈 ※安宅の関 石川県小松市の日本海側にある関所。 ※暮鐘 日暮れ時に打ち鳴らす鐘。また、その鐘の音。 晩鐘。 ※寒山 山のさびしげに見える山。 ※寂滅 仏語。迷いの世界を離脱している境界。 無明、悟りの境地。 ※煩惱 迷いや苦しみの原因となる心のけがれ。 ※無常感 虚無感と同義として扱われることも多い。 ※篠懸 修験道の行者山伏が衣の上に着る麻の法衣。 ※野辺 野のほとり。 野原。 野。 ※小径 細い道。 ※如月 日本における旧暦二月の異称。 ※海津の浦 畿内と北陸をつなぐ古代北陸道の鞍結駅が置かれたとする説があり、越前敦賀に通じる七里半越の起点となっている。 ※主従 主となる者と従となる者。 ※彷徨 いてもなく歩く。 ※木芽山 福井県の越前地方と若狭地方を隔てる峠である。 ※関山 関所のある山。 また、関所と山。 ※陸奥 現在の福島県、宮城県、岩手県、青森県、秋田県の一部に相当する。 ※勧進 仏教の僧侶が衆庶の救済のための布教活動の一環として行う行為の一つで勧化ともいう。 ※遊子 家を離れて他郷にいる人。 旅人。

通釈 暮れの鐘の音が寒山に響き、無常感が漂う。

短歌 義経一行の法衣は露に濡れ、乾くまもなく野辺の小道を目的地に向かって歩く。

通釈 海津の浦を通過する時の風は冷たく一同は彷徨いながら安宅の関に向かった。

短歌 木芽山峠は夕方の雲が隔ち、松林に打ち付ける風が安宅の関を閉ざしている様だ。

通釈 この安宅の関を難なく切り抜けて通過すれば、目的の陸奥はあと一步。この語を聞いた旅人、また人々は悲しんで泣く事であろう。